

幅広い学びに対する学生のニーズ ——学生は何を求めているか？

2023年度東北文化学園大学 FD・SD 全体研修会

「学生との意見交換会」より

小 淵 高志^{*1}

要旨:2023年8月2日(水)に、本学は第2回FD・SD研修会を開催しました。研修は、「本学の特色をいかにカリキュラムへ反映させるか？」をテーマに、午前と午後とに分けて行われました。幅広い学びに対する学生のニーズを探るため、当研修会においておよそ1時間半をかけて学生との意見交換会を行い、学生10名が他学部や他専攻との連携について自身の経験を踏まえて発表しました。

本稿では、全体研修会における意見交換会の内容を紹介します。意見交換会に参加した学生からは、探究理解プロジェクトや専門職連携論などの授業を通じて他学部との交流の実績はあるものの、時間割の制約や単位数の関係から十分に活用できていない現状が報告されました。また、興味関心がある場合でも他学部の授業を受講するハードルが高いことが指摘されました。今後、他学部との連携を深めるために、成績に関係しない形でのオンデマンド授業や休暇中の短期集中講座の開催、Google Classroom等の活用などが提案されました。

キーワード:FD・SD、カリキュラム、学び

座長:山本 和恵・建築環境学科教授

はい、ありがとうございます。学生さん、貴重な夏休み、お集まりいただきましてありがとうございます。また支援の先生方におかれましては、丁寧にご指導いただいたと思います。御礼申し上げます。

それから画面の向こうの教員の皆さん、学生さんが今壇上に立ってお話をしてくれている体制に入って、研究室でお聞きの方はぜひ、地下大講義室の方にご移動いただきまして、じかに学生の言葉を聞いていただければ、というふう

に思います。よろしく申し上げます。

それから、このシンポジウムは学生が主役となりますので、支援の先生はあくまで支援ということで待機していただいておりますし、必要に応じて学生さん同士での質問なども交えていくといいのかなとも思いますので、活発な意見交換ができたというふうに考えております。皆さん準備の関係で、並んでる順番にお話いただくのがいいかなと思います。よろしいでしょうか。はいそれでは早速、理学療法の中村さんから話をお願いいたします。

*1 東北文化学園大学現代社会学部現代社会学科 FD・SD 委員

学生：中村 美稀・理学療法学専攻3年

理学療法学専攻の3年の中村美稀です。初めに、これからの社会に生きる者として、今の私達には広い学びが必要であると考えます。私は理学療法学を専攻していますが、理学療法士は、医療という場で働く存在である以前に、社会の一員です。そのため、専門的な知識や技術だけでなく、社会との繋がりを意識する必要があると考えます。本学は総合大学ですが、総合大学の強みとしては、自らの行動次第で視野を広げられること。社会に出る前の今このときに、様々な分野を学ぶ学生同士が容易に知り合えることであると思います。医療に携わる多職種に対しての理解を深める学びや、医療には直接関わらなくても、間接的に関係してくる分野を学ぶことは、総合大学だからこそできる、学際的な学びであると言えます。

では、今後、学際的な学びの中で、私達が学んでいくべきことについて具体的に述べていきます。一つ目の視点として、チーム医療における理学療法士として、多様な学びについて考えます。これまで、多職種の講義を受ける機会が何度かありましたが、学年が上がるにつれ、当然ながら専門科目が増えた学科の授業や活動を見る機会が少なくなりました。

そのため、他学部がどのような分野を学んでいるのかが正直わからないのが現状としてあります。専門職連携論という科目の中で、他学部に対するイメージが持てていないと感じたことがあります。加えて、グループ編成の都合上、どうしても関わりがない学部もありました。それぞれの学部の教室を見学し、学生同士がテーマを決めずに自由に会話できるような機会を作ること。グループ編成をその都度変えることで、より多くの学部と関わることができ、多職種理解がより深まると考えます。同じ目標に向かっていくチームとして、それぞれの職種のアイデンティティを理解し、彼らが大切にしている考え方、そして理学療法士に求めていることを知ることが大切であると考えています。

二つ目の視点として、社会における理学療法士という立場から、広い学びについて述べていきます。医療に間接的に関わる分野の例として、まず建築分野を挙げます。家屋調査として、対

象者が主に回復期病院から自宅へ退院する際、体の変化を踏まえて、住宅に携わる機会があります。これに関し、福祉住環境コーディネーターの資格を持つ理学療法士も増えており、建築分野の知識も求められていきます。また将来病院に勤務する際には、病院、あるいは自分自身に対する利益も考えながら働く必要があります。将来その専門知識を生かして開業する際にも、経済学分野の知識が求められます。また、今後深刻さにさらに拍車がかかる。高齢化に対して理学療法士は、介護の分野と切り離すことができなくなっています。

このような点から、総合大学であることを生かし、建築系、介護などに学ぶことで、医療にとらわれないものの見方を得ることができると考えます。このような学際的な学びにより得られるものとして、私はリーダー制を挙げます。多職種と関わることで、チーム医療の中で、自分には何が求められていて、何をすべきなのかを考える経験が増えます。多職種への理解があることにより、職種間コミュニケーションの架け橋となり、率先してチームをまとめていく存在になれるのではないかと考えます。

また、間接的に関わる分野への学びは、今後の地域貢献に生かしていくことができます。対象者を取り囲む環境に対して、多方面からアプローチする力になると考えます。私自身としては、職場の中で、ただ盲目的に働くのではなく、職場の経済が円滑にいくような気配りや、かなりの問題点を解決するためのアプローチを積極的に行うため、広い視野や行動力を学際的な学びから培っていきたいと思っています。そして本学の強みを生かした学び関わりから、医療において、あるいは社会において先立って行動を起こすことができるリーダー性を養っていききたいです。

これまで必要とされていることを学ぶという観点で考えてきましたが、第1として、私は自分の意欲のまま学ぶことができる体制を期待します。理学療法学専攻専門科目で目一杯の状態、科目選択においても最小限に抑える傾向があります。しかし、自分が学びたいと思うものに取り組んでいくことこそが、意欲的な学びであると私は思います。専門科目の幅を広げるだ

けでなく、それらの科目を隔週にするなどして、他分野と関わりやすく、かつ専門科目との調和を図ることも必要となります。理学療法士という視点を超え、学びの楽しさに立ち返ることができるような学びをしたいと私は考えています。以上で発表を終わります。ありがとうございました。

学生：兼平 実侑・作業療法学専攻 3年

私は作業療法学専攻3年の兼平実侑です。本日はよろしくお祈りします。今回私は1年次に開講されている輝けるものの授業についてと、他専攻の講義の受講について、学部学科をまたいだ教員による授業の3点についてお話をさせていただきます。

私が初めて作業療法学専攻以外の先生の講義を受けたのは、1年生のときに輝けるものの授業として開講されていた人間文化探究でした。この授業を通して先生方が選んだ人物のエピソードから、他者の生き方に関心を寄せその人の生き方や経験について学び、自分の生き方と照らし合わせて考えられたことで、自分が成長するための良い機会となりました。また職業人としてどうあるべきか自身の理想像についても学ぶことができました。私は入学後から作業療法についての多くを学んできました。私が現在学んでいる作業療法士は、対象者がこれまでのような暮らしをしてきて、どんな経験を得てきたのか、個人の生活歴を深く読み取り、考察した上でリハビリテーションを行っていきます。その人の人となりや経験を加味した上で、対象者により添った支援を行うことが、作業療法士としての強みです。

しかし、対象者となる方々の生活を知ることが大事だということは、知ってはいるのですが、対象となる方には、病気や障害があるため、どうしてもわかりやすい病気や障害を何とかしなくてはといった思考になりがちです。そんなとき、人間文化探究の講義の中で、作業療法士以外の先生方のお話や、主題である人物の生き方について触れ、先生方やその人物が過去にの経験で生活で経験してきたことが、現在の生活に繋がっていると知れたことは私にとって貴重な学びでした。この学びは、病気や障害といった

視点に偏りがちな私の考えを、作業療法士としての思考に大幅に広がりを与えてくれるものになっています。

また、作業療法士は様々な経験をされてきた方を対象とするため、文化探求の講義において多くの方の価値観や生き方について触れることができ、より広い視野を身につけることができた貴重な体験となりました。

次に、他専攻の講義への事項についてお話します。私はFD・SD委員会の打ち合わせにて、他専攻の講義を受講できることを初めて知りました。私の周りでも他専攻の講義を受講できることを知っている人はおらず、実際に受講している人もいないのが現状です。また授業に参加したいと思っても、時間割の都合上、選攻の必修科目や実習科目などかぶってしまっているのが現状です。6限目や土曜日などに開講していた場合はどうかとも考えましたが、帰宅後や週末はレポート、中間試験等の準備に追われ、せっかく受講しても講義に集中できず、身が入らないように思われます。

そんな私の学習環境ですが、何とか改善策はないものかと考えてみました。まず他専攻の講義も受講できることを周知させるための手段として、他専攻にも開講している授業に関しては、わかりやすくグーグル・クラスルームやユニバーサル・パスポート等の教務ポータルシステムで呼びかけを行うことで、現在よりも情報を得られやすくなるのではないかと思います。時間割の都合上、受講できない場合については、オンデマンドとすることで、他専攻とともに受講するのが難しい学生も自分のタイミングで学習することができるのではないかと考えます。他専攻の講義を聞くことができれば、多種職についての理解が促進し、多職種連携を円滑に進めることができるきっかけにも繋がるのではないかと考えます。

最後に、学部学科をまたいだ教員による授業についてお話します。作業療法学専攻では、他学部他学科の先生による講義を受ける機会がありません。私は3年生の前期に、生活環境技術学という授業で、理学療法学専攻の黒後先生による足や体幹の義肢装具についての講義を受けました。作業療法に関する義肢装具につ

いては学んでいましたが、理学療法士である黒後先生の授業を受けたことは、作業療法士の視点とはまた別の視点で義肢や装具について学習することができる良い機会になりました。

作業療法学専攻が他専攻の教員から直接講義を受けることができる科目はこの教科1科目のみです。理学療法学専攻の学生が、作業療法学専攻の学生よりもこういった機会が多いことも今回初めて知りました。作業療法士として臨床現場で働く上で、他職種の先生方の専門的なお話を直接聞くことは大いに役立つと思います。作業療法学専攻においても他職種の先生方からの直接お話を聞く機会が増えていけばいいなと考えています。

また医療職以外の先生方からの講義も、作業療法士としての思考の幅を広げるためにはとても良い機会になると考えます。内容の整理が不十分で分かりにくいところがあったかと思いますが、以上となります。お聞きいただきましてありがとうございました。

学生：鈴木 映里・言語聴覚学専攻3年

言語聴覚学専攻3年の鈴木映里です。本日はこのような機会を与えていただきありがとうございます。私は、学際交流ができることに魅力を感じ、本学を志願しました。私以外にもそのようなことを書いた人は多いと思います。

しかし、入学してみて、学際交流の機会はあっても、うまく活用できていないと感じます。ではなぜ活用できていないのでしょうか？ 時間割の都合や勉強量から時間をやりくりするのが難しい。自分自身の専門分野の知識が十分でないから、他専攻の学生と関わる自信がない。本当は他専攻の学生に聞きたいことがあるが、勇気が出ない、こういった声が多く聞かれました。私がこれまで他学部、他専攻の学生と交流した機会は、主に三つあります。

一つ目は合同の授業です。重点的に学んでいる部分が異なるため、理解するのに苦労した内容もありました。しかし、自分たちの知識で足りていない部分を自覚できたのは、良い機会でした。

二つ目は、他学部との交流を重視した理解探求プロジェクトや専門職連携論などの授業で

す。1年時に履修した輝けるものの授業では、全学部混合のグループごとに秋保の地域創生についてアイデアを出し合いました。私達のグループでは、健康増進を目的とした朝活プランを考案しました。各専門の特色を生かしたアイデアが出され、それらを一つのプランにまとめる作業は、将来の多職種連携にも繋がると思いました。

三つ目はGEPです。TOEICの講座や福島の施設に宿泊して、英語の勉強をしてきました。専門や学年の違う学生と同じ向く目標に向かって勉強すると、新しい知見が得られ、1人で勉強するよりも、有意義な時間を過ごせました。以上のことから、私は総合大学としての学びを強化するには、講義の内容や機会を充実させることと、他専攻の学生と共同して、何かを計画実行する機会を増やすことが必要だと考えます。そこで三つ提案があります。

一つ目は、国家試験内容を教科ごとに分担していただくことです。分担は、国家試験の年度と問題番号だけで良いので、各専攻のものが確認できたら嬉しいです。授業内容の漏れを防ぐだけでなく、他専攻と共通している科目の国家試験問題にも取り組みやすくなると思います。また、わからない問題を、他専攻の学生と教え合うチャンスにもなりうると考えます。

二つ目は、単位の修得に関わらず、他学部の授業を聴講できる機会を設けることです。現在、他学部開講科目の履修は可能ですが、必修科目に手いっぱい、なかなか踏み出せない状況にあります。出席数や試験に関わらず、聴講ができれば、専門性を上げられ、多職種連携に繋がるのではないかと思います。

三つ目は、学生が主体となって受けたい授業をリクエストする機会を設けることです。例えば、私は医療英語を学びたいと思っているのですが、なかなか1人で学習するのは難しいと感じます。私以外にも医療英語を学びたいと思う学生がいるのであれば、学部専攻問わず一緒に勉強ができれば嬉しいです。今の時代の学生は目立つのを嫌う傾向にあると言われますが、それはチームで動けば強くなるというメリットでもあります。なかなか一歩を踏み出せない私達ですが、先生方に対応いただけたら幸いです。

以上で終わります。

学生：中村 彰吾・視覚機能学専攻 3年

視覚機能学専攻3年の中村彰吾です。実はこのような機会を設けていただきましてありがとうございます。私達視覚機能学専攻、以下、視能では、この議題を持ち帰り、主に3年生の中で意見を募りました。そして、主に二つのことについて今回はお話ししようと思います。

まず最初に、他専攻他学部とのこととお話いたします。視能では、主に専門職連携論の授業にて他専攻との関わりがありました。講義では、実際に臨床に立つ講師の方々から実際の臨床の体験談などを交えたお話を伺うことができました。

また、前期の後半では、2週にわたりグループワークが行われました。私の班では、理学療法や作業療法、さらに臨床工学技士の学生の後、一つの症例について、自分たちが提供できる医療について話し合いました。そこで一つ課題が見つかりました。講義ではいろいろな知ることはできたものの、やはりまだ概要でしか理解ができず、詳しいところまでは完全には理解することはできませんでした。そのためグループワークでは、お互いの意見のバランスを取るというよりは、どちらかというとお互いの意見をただ羅列したような感じになってしまいました。これには、まだ深く、お互いの専門の中で何をやっているか、どういったものを学んでいるかということが、はっきりしていないということが考えられます。

ここで一つ要望がございます。それらを改善するために、各学科内で実技試験などがあると思います。その実技試験のための練習の際、被験者を他学科、他専攻から募集できる制度が欲しいという意見がございました。それによって他学部他専攻などがどういった検査、実技をやっているのかが鮮明に見えてくるという利点がございます。

また、その検査の中で実際に被験者は、これはどういう検査なのですか、どういうものを見ているんですかという質問が出て、さらにより深く、お互いのことについて深く知れるのではないかとございます。これはさらに

被験者の方にもメリットがございまして、いつもは友達間などで知った者同士での練習にはなってしまいます。

そこで、やはり緊張感などは失われる、だんだん失われてくるとは思いますが、他学部他専攻からの学生を募ることによって、緊張感が生まれ、1回1回の練習により良い学びが得られるというメリットが挙げられます。そして次にお話する話題に関してなんですけれども、次は他学科他専攻ではなく、他大学との連携についてのお話になることをご了承ください。

私達、視覚機能学専攻では、台湾の亜細亜大学と連携し、学生を招き国際交流を行っております。今年の5月にも、亜細亜大学からの学生を何名かお招きいたしまして、その様子は私達視覚機能学のツイッターがでございます。そちらに様子が上がっているのでそちらもぜひご確認いただければと思います。日本では眼科で検査し、処方箋を出してから、眼鏡屋さんで眼鏡を作ってもらおうという流れになっています。

しかし、台湾はそれとまた違いまして、その診断や処方箋の作成は眼科医さんは通さず、眼鏡屋さんで直接出してもらってそのまま直接眼鏡を作れるという違いがございます。こちらの処方箋の作成や診断など、私達、視能訓練士はできません。

しかし、台湾のOPSという職業では、そういったものも全てできるような学習を行っているという伺いました。日本と台湾では検査や、その考え方などについて少し違いがございます。さらに、検査の分野の得意、不得意なども異なります。それらを学ぶ機会を得られたら嬉しいなと思います。

しかし、現状では台湾の学生を招くということはされていても、私達日本の学生が台湾へ赴くということはまだされておられません。ですので、本校にも、他大学との連携を生かした、短期留学システムがあるとよいという意見がございました。

以上が視覚機能学専攻で話し合った意見でございます。ご清聴いただきましてありがとうございます。

学生：及川 優花・看護学科3年

看護学科3年、及川優花と申します。私は現在、保健師資格取得を目指し、看護保健師課程で勉強しています。時間割が月曜日を除き、毎日1から5限まで全て埋まっており、そのような中で、各領域の看護過程の展開や健康教育事業計画の策定、発表に向けた準備や課題に追われながらも、日々勉学に励んでいます。

私は1年次に探究理解プロジェクトから生命を考えるチーム医療福祉論と、2022年3月から4月に本学で開催された短期集中講座である地域生活の視点で学ぶ重度身体障害者の暮らしに、他学科との連携した内容について学びを得ました。現在も短期集中講座のときの講師の方や、2名の重度身体障害者の方と関わりを持ち、学生介助ボランティアとして活動が続いています。これらの学びを通して、私が感じた課題として、単探究理解プロジェクトと専門職連携論について述べさせていただきます。

まず初めに、探究理解プロジェクトについてですが、1年生は各領域について、足を一步踏み入れただけの状態です。先生側の領域の垣根を越えられているのかもしれませんが、各領域ならではの知見を含めた話し合いはできず、学生側からはあまり領域の垣根を超えたという声はありません。次に専門職連携論についてです。本大学でも専門職連携を謳っており、私自身、この大学に入学した理由の一つでもあります。

しかし、3年次は専門職連携論を入れると、毎日1から5限となり、体力的にも課題を日々こなす上でも難しいです。また、看護師のみを目指している学生は、3、4限目が空きとなるため、履修がしづらい状況にあります。

そのような中、専門職連携論を履修している学生に聞いてみると、特に事例を用いたグループワークが面白く楽しい。看護職として何を求められているか。他の職種が何をしているのか。どこまでが専門用語なのか。どの言葉に変換すれば伝わるのかがわかり、履修してよかったという声が聞かれました。

以上を踏まえ、課題点として、1年次に探究理解プロジェクトの意義を理解し、領域の垣根を超えた学びを得ることは難しい。専門職連携を学びに本学へ入学しても、カリキュラムや時間割上履修が難しいという課題が考えられます。私からの要望、提案として2点あります。

一つ目は、1年時だけではなく、3年次や4年次に再度、探求理解プロジェクトを短期集中講座として履修できるようにする。例えば、1年の授業内で扱った障害とわかった子供を出産する親の事例や、実際に出産し、障害を持って生まれてきた子供にどのような視点を持って、各職種が関わるのか、保健室で保健師として家族と今後どのように支援するのか。など、専門知識を学んでみて、命についてグループワークをするといった内容で行うのはいかがでしょうか？

二つ目は、看護学科のみで行われているチーム医療論と専門職連携論を統合する、もしくは専門職連携論を現在の月曜午前から3限に変更し、選択科目でも履修しやすいようにしてほしいと思います。学生のニーズを踏まえ、さらによりよい学習環境となることを期待します。以上で看護学科3年及川優花の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

二川原東吾現代社会学科3年



本日はよろしくお願いたします。現代社会学科3年の二川原東吾です。本日は、他学科、他学部との交流実績や各研究ゼミとの交流、私が在籍する現代社会学科での他学部との連携の現状。そして、それらを踏まえて、幅広い学びを学生が得るための提案についてお話させていただきます。よろしくお願いたします。

まず私の他学部との交流実績といたしましては、本学の特徴である1年次に受講する輝けるもの探求プロジェクトの他に、3年次前期に受講する専門職連携論などの科目が、他学部等の交流を図るものになります。

専門職連携論では、各領域の専門職の方が非常勤講師として講話を行ったり、授業で用意された各課題や事例に対して、他学部、他学科の学生らとグループワークを行って、クライアントや利用者への対応を検討します。このグループワークで、専門職を目指す他学部の学生が、どのように機能し展開していくのかを、体験する機会となりました。続いて、各研究ゼミとの交流という点では、地域活動とボランティア事業を行うという点で、福島県の飯舘村への研修が行われます。この研修では、私が所属する現代社会学科の他に、作業療学科や看護学科など、他学部との学生との現地での学習や研究発表を通じた連携を行い、知識の共有と見聞を広めるという体験が行われます。

続いて現在の現代社会学部との他学部との連携について、私なりに分析しました。現代社会学部現代社会学科では現在、社会学専攻は社会調査士取得、社会福祉学専攻は社会福祉士や精神保健福祉士の取得のための単位の取得が目標となる制度が多く、授業構成のほとんどがそれらの要件科目を取得するためのものになり、他学部との交流や知識を得る専門科目は、比較的少ない状況にあります。

これらの状況を通して、幅広い学びと専門職の知識を学ぶためには、先ほど紹介した専門職連携論のように、他学部との学生とのグループワークや、各専門職の非常勤講師の講話によって、自分の学部だけではなく、他の学部の知識を積極的に取り入れる授業が継続的に行われることが望ましいです。実際に、専門職連携論を受講するまで、実際に他の学部がどのような学

びを受けているのか、どのような資格の取得が可能なのか。それらが将来自分進む専門職とどのように連携しているのか、知る機会がないことが現状としてあります。

私事にはなりますが、先ほど紹介した社会福祉士や精神保健福祉士の資格取得の際に、理学療法や作業療法そして建築系の教養がなく、問題への認識理解が難しい傾向にありました。今後、幅広い学びを得て専門職の知識を得るために必要なこととしては、短期間に集中し、各学部が同じ資格取得のための授業、短期的に集中した講座があることだと感じます。各学部の学生が同じ講義や解説、基礎的な知識を様々な講師の方から受けることで、お互いの専門職に対する知識や教養、他学部との学びが教養され、それぞれが幅広い学びを得るための過程に対して役立つと感じています。

最後に、実際に私が3年間過ごし、他学部の資格の知識や科目の教養を得ることは難しい状況にあります。なので、積極的な交流と、他学部とのグループワークを通じた形式の授業が積極的に行われることが、大学4年間という短い期間で、自らが選んだ学科専攻だけではなく、将来に役立つ他学部の教養を得るために必要なことだと感じます。短い時間でしたがご清聴ありがとうございました。

学生：井上 ことね・経営法学科3年

経営法学科3年の井上ことねです。私の方からは、本学におけるこれまでの学びと、この先求めるものということで、今までの、他学部との交流の実績や、この先求めるものについてお話していきたいと思います。どうぞ、よろしくお願いたします。こちらが目次になります。

一つ目といたしまして、他学部の受講生との交流ということで、探究理解プロジェクト、人間文化探究での学びについてご紹介いたします。人間文化探究では、実際にロールモデルとなる人物の人生を学びながら働く魅力を考えると同時に、人としてどうありたいか、社会にどのように貢献したいかを考えるきっかけとなりました。この授業では受講生の発言の機会が比較的多いため、他の学科の全く異なる価値観の学生の考え方が聞けて大変興味深かったです。

これらの科目は1年次に配当されるので、大学に入ってすぐにこの講義を受けるというふうになって、いわゆる大学の一般的に想像するような講義とはちょっと違うような、それこそ受講生の発言の機会が多い授業であったため、当初は驚きが強かったです。しかし、とてもいい体験になりました。

そして、他学部の教員の科目ということで、私は1年次に心理学を受講したので、そのことについてもご紹介させていただきます。こちらは専門用語などがたくさん出てきて各学問的な要素が多く、一般的な講義形式でとても学びごたえがあったことを覚えています。こちらは毎講義ごとに受講生の感想などのコメントが全て公開され、先生からのレスポンスもあるので、双方向性のある講義だったと思います。考えを閲覧できる一方で、その公開されるものは匿名のため学部まではちょっとわからなかったもので、他学部の学生と一緒にこの授業を受けているんだという実感は、あまり感じられませんでした。

そして、元々経営法学部というのは、経営や経済、法律関連領域などの科目を、横串を刺したように学べるような学部ですから、学際的な学びという点においてはこの経営法学部にいるだけでも、かなり充実しているのではないかと感じる場合があります。

次に、他学部との交流実績という点で専門基礎科目、法律が法学概論でのセミナー実施についてお話したいと思います法学部1年時配当の授業ではありますが、現代社会学部、医療福祉学部などの学生さんも参加しており、1年生だけでなく1年生から4年生までが参加している講義となっています。

この法学概論の中で私達、私が所属する秋山ゼミが中心となって、消費者セミナーを実施させていただきました。外部講師といたしまして、公正取引委員会事務総局、東北事務所長の今野先生や、取引課長の大吉先生をお呼びいたしまして、ご講義をしていただきました。またこのセミナーの中でグループワークも実施いたしました。先ほども申し上げた通り、この授業、三つの学部の1年生から4年生が参加しています。

特に1年生は、グループワーク初心者であるため、議論に不慣れであること。そして、実際に1年生からの声であったのが、他学年や学部生とのグループワークに不安を感じるという点でした。そのため、議論や発表がどうしても時間内に終わらないのではないかという懸念がありました。

そのため、私達ゼミ生は、いかにこのグループワークを円滑に進行させるのか、という点を課題に設定して、このグループワークの事前準備に取りかかって行きました。実際の座席表はこちらになります(会場では資料を映写しながら説明。本稿では省略)。この中で他学部生や他学年との、混合2部がこの赤枠で囲まれた通りです。そして、私達秋山ゼミの3年生はファシリテーターとして事前準備で、タイムテーブルや発表雛形の作成。そして、グループワーク当日は、実際に受講生に声をかけてサポートなどをいたしました。右側にあるのが、発表の雛形ですここには、グループワークの流れやグループワークでどのような意見を言えばいいかなどを示しています。

また、実際のタイムテーブルがこのようになっています。この中で、秋山ゼミ生がこのタイムテーブルをきちんと進行させるためにどのような役割を、どのような仕事を受け持って進めていくかという打ち合わせをしました。その結果、これは当日のグループワークの様子ですが、議論が活発に行われ、受講生の皆さんの発表もとても堂々としていたように思います。

さて、今まで他学部との関わりについていろいろお話してまいりましたが、私が考える他学部との関わりの醍醐味といいますと、まず自分にはない視点を得ることができること。そして、他の専門職の力を借りれば解決できることではないか、というふうに考えております。そのため、私は同じ社会問題を様々な専門の視点から解決してみたいなというふうに思いました。

前述の三つの科目、輝けるものと心理学、そして法学概論というのはどれも1年次配当、専門性がまだ備わっていない時期に、どうしても受講してしまうこととなります。そのため、どうしても他学部との関わりを実感できる段階に

までは、まだ至っていないのかなと思います。ですから、専門性の深まる三、四年次生、三、四年次にこそ私は他学部との交流が欲しいなと考えております。専門的な視点が備わった状態で、もう一度他学部生との意見交換や議論がしてみたいと考えております。

ただし、三、四年次となってしまうと、どうしても専門科目など、自分の学部の中でやるのが、どうしても増えてしまう。増えてしまうので、そこは少々障壁になってしまうのではないかと考えております。ですが、探求理解プロジェクトのようないろんな学部と一緒に関われるカリキュラムを、三、四年次にも配当してみるのはいかがかと考えております。

また、学部間での合同ゼミや合同発表会なども面白いのではないかと考えております。ただし、現状、他の学部のゼミとの交流という点ではどうしても薄いなというか、そういうふうに感じてしまうので、その足がかりをいかに作れるのが課題であると考えております。私からの発表は以上です。ご清聴どうもありがとうございました。

学生：浅野 颯斗・建築環境学科3年

建築環境学科3年浅野颯斗です。本日はどうぞよろしく申し上げます。まず初めに、私の他学部との交流実績についてお話をさせていただきます。他学部との連携科目として、私は探究理解プロジェクトの地域活動ボランティアを履修しました。そこで他学部との先生の話が聞けて、建築以外の幅広い知識を得ました。講義の中では、認知症カフェという存在を初めて知りました。この認知症カフェというのは、認知症当事者や家族などが集まる認知症サロンのようなものです。そんな方々が、孤立してしまうリスクを減らすことができるものでした。自分の地元も高齢化率が非常に高いため、そういった方たちの居場所を作ってあげたり、力になれるのではないかと思います、その存在を知ることができて良かったと思います。

他にも、震災後のある地域でのまち作りについて知り、自分が学んでいる建築と関わる部分があったので、非常にためになりました。次に建築環境学科のカリキュラムの特徴としては、

それぞれ特徴を持つ三つのコース、建築デザイン、健康インテリア、設備コースの3コースにわかれています。自分は健康インテリアコースに所属しています。学科教員がカリキュラム外で、資格取得のための勉強会を運営してくれています。他学部との連携の科目は履修せず、ほぼ他学部との連携の経験はありませんでした。自身の経験としては、他学部と開設科目履修の制度はあるものの、特段必要と感じませんでした。他学部連携の経験がなかったことから、他学部との連携を考えてみました。

一つ目としては、医療福祉学部との連携です。医療、医療系科目を学び、子供やけがをした人、高齢者、車いす使用者など多くの方たちにとって物理的に生活をしやすい福祉対応住宅を設計したいと考えています。住宅を新設される多くの方が30代、40代と元気な若年層のため、自分自身や家族が高齢者になったときの状況を想定して計画することはほとんどないのが現状です。

そこで、年を重ね、体が不自由になったときのことを考え、20年後、30年後の家族の状況を見据えた空間デザインをし、また、高齢者だけでなく、小さいお子さんにも住みやすい住宅にしたいと考えています。

次に現代社会学部との連携です。建築に求められる役割には、大きな期待が寄せられています。都市再生や持続可能なまち作り、環境問題やエネルギー問題、災害への対策など多くの課題があります。建築環境学科では、幅広い観点から建築都市を学べるようにカリキュラムが編成されています。建築学の視点から社会学を学ぶことで、課題解決に貢献できる建築士、都市計画コンサルタント、公的機関でのマネジメントなどが学べます。

次に、経営法法学部との連携です。私はカフェの店舗のインテリアに関わる仕事に携わりたいと思っており、ゆくゆくはカフェを開業したいと考えています。経営方法を学び、カフェ・喫茶店を開業、経営するポイント。喫茶店開業に必要な資金、喫茶店の経営、流通やマーケティングなどの様々な知識を得て、建築学と合わせてカフェを開業経営するスキルを身につけたいと考えています。

最後にまとめになります。本学は医療福祉学部、現代社会学部、経営法学部、工学部を併せ持つ大学です。その特徴を生かし、4学部が連携協働して、教育、研究、地域貢献が行われています。他学部との連携が増えれば、建築と異分野連携により、可能になる人々の暮らしや社会に新たな価値が創造できるかと思います。私からの発表は以上になります。ご清聴ありがとうございました。

学生：高田 陸・知能情報学科3年

情報システム学科3年の高田陸です。私がかつてまで知能情報システム学科の授業を受けて、他学部との連携交流を感じたことはほとんどありませんでした。原因としては、本学科の専門基礎科目が、情報分野に特化していることから、他の学部が関わる余地がないことが多い基礎科目の授業で、他の学部と受講をともにすることはあっても、その多くが講師の話の聞くだけの一方通行な授業であったり、座学がメインで、他の受講生とのコミュニケーションの機会が一切ない授業であったりすることが考えられます。

探求理解プロジェクトについては、私が2021年に履修した人間文化探究では、当時流行していた新型コロナウイルスの感染拡大を考慮したためか、グループワークやディスカッション等がありませんでした。そのため、学部を越えた人間関係をつくることは叶わず、他学部ではどのような講義が行われているのかを知る手段がなかったように感じました。

また、2年生のときに、他学部の授業を履修できる制度の存在を知ることがありましたが、先述のように他学部に対する興味関心が希薄だったことと、自分の学科の授業やその課題などで手一杯だったことが理由で、他学部の科目の受講はしませんでした。3年生になった現在は専門科目の履修に集中しているため、他学部との受講の機会がなく、あったとしても、受ける余裕はないと思います。

これらのことを踏まえると、学部間連携をより深めるのであれば、やはり1年生のうちしかないと考えました。具体的には、探究理解プロジェクトの授業はもちろん、座学がメインにな

りがちな基礎科目の講義でも、グループワークやディスカッションの場を設けることが効果的であると思います。自身の興味関心以前に、他学部のことを知る機会がなければ、連携した授業を受けたいとも考えられなくなります。

そのため、1年生で主に履修する基礎科目で、他学部の人と関わる場を用意すればよいきっかけになるのではないのでしょうか？ 例を示すと、私が受講した英語Ⅰおよび英語Ⅱでは学生間による英会話コミュニケーションを行っていました。その授業は知能情報システム学科の他に、建築学科も履修しており、授業を通して多くの人と話すことになったため、個人的には良い取り組みだったと思います。

私は履修していませんでしたが、知人から聞いた話による韓国語Ⅰおよび韓国語Ⅱでも、同様の取り組みを行っていたそうです。同じ学科である中国語Ⅰ、中国語Ⅱにも授業にこのような要素を取り入れるべきだと思います。

また、他の基礎科目の中でも、特に他学部の履修者が多かった心理学概論や健康科学概論医学総論にも、学部学科を交えたグループワークを取り入れると良いと思いました。提示されたテーマに対して、それぞれの学部の観点からの意見を交わすことで、学生全体の他学部への関心が強まると思います。これらについてぜひ前向きな検討をお願いします。以上になります。ご清聴ありがとうございました。

学生：榊原 花梨・臨床工学科3年

臨床工学科3年の榊原花梨です。臨床工学科では、特に3年生前期に受講する専門職連携論で、他学科と交流する機会がありました。授業内では一つの事例について、看護学科やリハビリテーション学科の方々と、お互いの職種の特徴について理解しながらケアの方法や治療の目標について考え、それぞれの学科が一つの目標に向かってグループ活動を行いました。

このように、他学科とグループ活動を行うことは初めてであったので、他の学科の方が学んでいる内容や、自分が学んでいる部分と同じことを学んでも、重点的に知っている内容に違いがあることなどを知りました。グループ活動の際に課題に挙げたことは、自分たちの行

うべき業務はどこまで、どこから相手に任せることができるかわからないという点です。それぞれの学科では、自分たちの専攻分野について詳しく学ぶものの、他の専攻分野については、表面上でしか触れておらず、自分が立ちいることのできる業務についての理解がまだ足りないことに気づきました。

しかし、お互い自分の専攻している分野の学びで精一杯であることは、話し合いの中でも感じられることでありました。いかに自分の学んでいる内容を相手にわかりやすく、かつ簡潔に伝えられるかが重要であると、講義を通して感じました。他の学科の方とグループワークを行うのは初めての経験であったため、何から話して良いか、コミュニケーションを取るのに戸惑っている班もあったと感じました。私達学生は、コミュニケーションをとるということについて学ぶ機会はほとんどなく、今自分が持っているコミュニケーション能力は、今までの経験や知識のもとで出来上がっているものだと思います。

もっとコミュニケーションを取る相手と情報を共有するなど、当たり前でありながらも欠けてしまっている部分を、他学科と協力し合いながら、補い合うことができる機会があると良いと思いました。同じ科目を受講したことがあるといえど、一緒に受けているだけであり、コミュニケーションをとることはほとんどないので、コミュニケーション能力を高めることができたら良いと思っています。

また、医療福祉、工学、経営法学部といったように、学びのスペクトルが違う多様な学科があるのにも関わらず、関わる事が無い学部学科はたくさんあります。特に同じ工学部でありながらも、建築環境、知能情報学科の方々とは、一年生で開講される輝けるもの以来全くありませんでした。工学部に所属していながらも、医療系の分野を専攻している臨床工学科は、医療系とそうでない学科の架け橋になることができたら良いと感じています。

臨床工学科では、受信アンテナを適切な場所に設置できないことによる受信不良が発生する事案について考える機会がありました。受信不良は建築段階においても対策がとれる場合もあ

り、現在では電波利用機器に配慮した建築ガイドラインが作成されています。

このように、一見関係のない学科同士でも協力し合うことにより、よりよい環境が作れることは間違いありません。同じ学校内に揃っているならば、このような事案について、建築学科と医療関係の学科が協力し合いながら考えたり、医療従事者目線の病院やクリニックに対して望む構造を話し合ったり、逆に建築関係の人たちは建築を行う際にどのような情報を欲しているのかなどをコミュニケーションを取りながら考える授業があっても良いと思いました。以上です。ご清聴ありがとうございました。

座長：山本 和恵・建築環境学科教授

はい、代表者の皆さん、ありがとうございます。大変立派な発表で、全ての学生さんが他の専門家との交流について、それぞれの立場でお話だけたかと思えます。ただ、うまく利用できる状況にないとか、やはりそういった枠組み自体が少ないのではないかとということがあり、できれば自主的にね、自分から参加することも大切だけれども、枠組みが弱いのではないかとご指摘もいただいております。

その中でいくつか提案がなされております。印象的だったのは、知識を授かる講義も大事ですけれども、学生の皆さんはグループワーク、他者の意見を聞いて自分の意見とすり合わせてみるとか、どんなふうに説明をしたら、自分の専門用語をうまく噛み砕いて伝えるとか、そういったグループワークに対する期待ですか、それ自体がコミュニケーション力を磨くという、特にコミュニケーション力を磨くための講義というのが用意されてるわけではないので、そういう場所で磨いてはどうだろうかというようなご提案。

それから、時間割に載せるととても取れないので、オンデマンドで開講してもらってはいかがか。あるいは、単位は必ずしも要らないので覗かせてほしい。あるいは、そのオンデマンドってちょっと見たいといったようなことに関してはですね、コロナ禍で私たちも慣れてきましたので、スプリットの技術を生かして、この辺はもしかすると応えられるのではないかなという

ようなことを思いました。

あと気になるのはね。どの学年で行うのが最適かということに関しては、いろいろな意見がございましたので、この辺ケースバイケースかと思いますが、具体的にお話を聞けるといいのかなと。あとは短期集中で行えば、多様な学部の人参加できやすいのではないかなというように、具体的なご提案をいただいております。とても有意義な、密度の濃いお話を聞けたかと思えます。

それでは、どうでしょう。登壇者同士で質問というのはちょっと難しいかと思えますので、まずはフロアからご質問等いただけますでしょうか？ ご意見でも結構です。コメントいただけませんかでしょうか？ はい、よろしくお願ひします。マイクお願いします。

質問者：加賀谷 豊・学長

学長の加賀谷です。本当に我々にとって貴重な意見を聞かせていただきました。ありがとうございました。看護の及川さんにちょっと聞きたいんですが、あの探求理解プロジェクトが、学部との垣根を越えられるものにならなかったというふうにおっしゃったと思うんですけども、それは学生がそういう準備ができてないという意味なのか、あるいはその授業を提供する側の工夫が足りなかったのか。その辺ちょっと教えていただけますか。



学生：及川 優花・看護学科3年

ご質問ありがとうございます。看護学科3年の及川優花です。探求理解プロジェクトの中で命を考えると授業の中では、グループワークとしておおむねそういうふうに、他学科とたくさんコミュニケーションをとって、話し合うということはあるんですけども、それに対して学生側にか、その学科ごとそれぞれのいろんな知識であったりこれからその専門性であったりとかっていうものが、そもそも一年生の時点で不足していること、不足しているってこと

はグループワークとして用意されていても、それがうまく、学生自身としても1年生の時点では、活用するには、っていう部分があるのかなと思っていました。この回答でよろしかったでしょうか？

質問者：加賀谷 豊・学長

わかりました。よくわかりました。それで先ほどあの、3年生ぐらいにもう一度、こういう授業が組まれてるといいんじゃないかと言われてたわけですね。

学生：及川 優花・看護学科3年

はいそうです。

質問者：加賀谷 豊・学長

よくわかりました。ありがとうございます。

学生：及川 優花・看護学科3年

ありがとうございます。

質問者：神村 伸一・知能情報学科准教授

井上さんに質問です。関連して高田くんにも同じ学科なので、今井上さんに聞いたことで何か考えがあれば、教えてください。

とても印象的だったのは、連携っていうか、いろんな分野の学生が集まって一つのことに取り組む授業が、自分の専門がまだあまり固まっていない一年生のときにやるよりも、例えば3年生のときなどかなり自分の学問的な学びが進んできたときにぜひやってみたかったっていう提案ありましたよね。私とてもいい提案だと思ったんです。

一方ですね、どんなテーマにしたらいでしょうか？ つまり3年生になっていけば、例えば経営法学科であれば経営や法学、あるいはストレートビジネスというようなことにかなりの学びと、自分の考えができてきているそれに近いような分野だと、例えば、知能情報学科の学生で、プログラミング得意だねとか、情報処理好きだよってというような人が混ざってくる形がいいのか、逆に自分がほとんど専門じゃないようなところと一緒に学びたいのか。それは両方とも専門じゃないようなところがいいのかな

と思うとか、あるいはもっと広くSDGsについて広く語ろうみたいな、そんなようなテーマがいいのか。

どんなのだったら、その3年生ぐらいのときの他分野の人たちがいろいろ集まった、あるいは2分野とか3分野の人が集まる大学の学びとしていいと思いますか？

学生：井上 ことね・経営法学科3年

はい、ご質問いただきありがとうございます。私が想定していたのは、広く社会問題という点で、そうですね、もしそういうことが実現したら実際にグループ内で今、話題になっている社会問題を、これを解決してみたいよねっていうのを学生同士で提示して、その社会問題を解決するために、自分の学部専門だったら何ができるかなっていうのを考えてみたりするのがいいのではないかと思います。

例えば私は今、特にジェンダーについて、ジェンダー格差について関心を抱いているのですが、経営法学部であればそのジェンダー格差の解消のために、例えば家族であれば同性婚問題であったりとか、そういう視点から解決ができると思いますし、また、医療福祉学部であったり工学部であったり現代社会学部であったり、そういった学部の方々は、その例えばジェンダー格差っていう問題に対してどういう専門の力を使って解決できるのかなっていう点に関して、すごく私は興味を抱いております。

ですからそのような社会問題を解決、1個の社会問題を解決するために、いろんな専門の力、どんな専門の力を使えば社会がより良くなるのかなっていう点について、ぜひ議論してみたいと考えております。このような回答でよろしいでしょうか？

質問者：神村 伸一・知能情報学科准教授

ありがとうございました。

学生：高田 陸・知能情報学科3年

知能情報システム学科3年の高田陸です。私はですね。テーマについては、どの学部に特定の分野によらない抽象的なテーマに設定すると良いと思いました。

そうすることでいろんな学部が、そのテーマに関わるハードルみたいなものを下げることもなりますし、あえて特定の分野によらないものにすればその分、そのテーマに対して自分の学部学科だったらどうかみたいなのを、学生たちに考えさせることで新たな発見にも繋がるんじゃないかなと思います。以上です。

座長：山本 和恵・建築環境学科教授

ちょっと、あの井上さんにもう一つ。経営法学のセミナーの方では、自分たちのやっていることを中心にして、ファシリテーターをお務めになりましたよね。そういうふうには、自分の得意分野をファシリテートするという意味では、3年生が他の低学年ですとか他学部の、あまり知識のない人をリードしていくってことは、できそうっていうことでしょうか？

あの、同じ学年で、他分野の人がガチンコで議論するっていうことだと、幅広い社会的なテーマが必要ですけど、ファシリテーターであれば、専門性のある程度押し出せるって考えてよろしいですか？

学生：井上 ことね・経営法学科3年

はい、そうですね。例えば、いろんな専門の方が集まって経営法学のやっことをみんなで行おうよっていう場合に、私達が先導してということでもよろしいでしょうか？

はい。そうでしたら、そうですね。特に私の所属しているには、そういったファシリテーターのお仕事をすごく丁寧に。そして、そうですね。下級生に向けてもすごくリードしてあげられるような方が結構いらっしゃるんで、そういった面で中心に立って、ファシリテートするという点では、すごく、私達、自信がある点かと思えます。

座長：山本 和恵・建築環境学科教授

ありがとうございます。はい、どうぞ。

支援教員：秋山 まゆみ・経営法学科准教授

今のちょっと補足をさせていただきますと、一年生の科目でしたので。だから、専門的なファシリテーターが必要だったんですけど

も、それがだんだん上の学年にしていくに従って、ファシリテートする必要がなくなってくると思うんですね。

そうしますと、また先ほど井上さんが言ったような3年生以降だと、そのガチンコでやるようになるんじゃないかなと思います。なので、ファシリテーターはある程度、あくまでもその1年生だからという形で、ちょっと補助的にという形で思っていたいただければと思います。

座長：山本 和恵・建築環境学科教授

やはり、一方的な講義をすることよりも、学生の皆さんは議論の場所を欲しているということが、非常によくわかりました。しかもそれを続けていくに従って、皆さんがファシリテーターの立場で、対等に議論ができるようになるというような、コミュニケーションの力をしっかり磨いているということがよくわかりました。ありがとうございます。他にご質問ございませんでしょうか？どうぞ。

質問者：大黒 一司・作業療法学専攻教授

あの作業療法学専攻の大黒です。今日お話された学生10人中7名の方から僕が担当してる科目が出てきましたので、一言。専門職連携論ですけど、あれ実際に皆さん講義を受けてもらって、それで14回のうち7回を僕が主にやって、他の回は非常勤とかですね、他の学部学科の先生にやっていただけてますけど、その7回のうち2回は丸々2コマですね、グループワークなんです。170人ぐらいの。

それで、もう残りの僕担当してる5回のうちの3回は、最後15分か20分ぐらいグループ編成して、それはもう事前に座席を指定して、そしていろんな学科が混ざるようにしてますけど、今日皆さんのお話聞いてて、特にあの事例をですね、やったのが非常に印象的だったようですので、そこに求めるのは、何かその事例検討し、事例を使って、何かその事例のことをしっかりやりましょうということよりもですね、あの、そこに集まった学生たちがそれぞれのその勉強している職種のことをですね、どんなふうに伝え合ってるかっていうことを主目的にしましたので。

ですから、その辺どうも発言を聞くと、その場でやっと初めて他の職種のことがわかったとかね。そういう発言があったので、あの最後の感想なんかにもそういうことよく書いてくれますので、そういう意味じゃ、あの今回のテーマとはちょっと違いますけどあれ、あのこの前に教員だけでやった教育って意味ではですね、非常にあの、役に立ってるかなという印象を受けまして、ありがとうございます。

それからもう一つ。あの、看護の及川さんが発言してくださったことですね。看護学生がですね、これ取りにくいんですね。非常に。それは僕が前から、一応教務には言ってるんですけども、実はどうもやっぱり看護学科の。僕も7学科専攻がですね。一緒の授業ですから、そこに時間割を取るっていうのがですね、非常に共通で取るの難しいらしいです。だけどぜひやってもらわないと、実は今年、看護の学生さんの履修者が非常に少なかったんです。非常にそれは残念なことですので、なんとか解決できないのかなと思ってますけど、ぜひ教務の方、これの相談をしたいと思います。あの、意見と言うか、感想です。

座長：山本 和恵・建築環境学科教授

はい。他にいかがでしょうか？

質問者：藤澤 宏幸理学療法学専攻教授

貴重な意見ありがとうございます。具体的に先ほど山本先生もおっしゃったんですけども、オンデマンドとか短期集中で、そういう学生、学際的な皆さんがいろんな学部から集まれる授業をしたらよろしいというご提案もいただきましたんで、何とか検討したいなと思ってる場所なんです。

ただ一方で、皆さんのお口からも出てきましたけども、いわゆるコ・ス・パですか。学生さんたちが、その最少の単位数で卒業するとかね。その他の授業が忙しいからなかなか手が出ないとか、そういう言葉が出ましたけど、我々が授業をする計画するヒントになればってことで、どうやったらそういう授業をね、受けもらえるようになるのかっていう、なんか学生の目線で言って、何かアイデアっていうか、我々

に対して助言がありましたらお願いしたいんですけど、皆さんお願いできますか一人一人。

座長：山本 和恵・建築環境学科教授

お願いしてよろしいでしょうか。学生の受けたい講義を主張したいって言っていらっしたかと思いましたが、一言ずつマイク回しててください。

学生：中村 美稀・理学療法学専攻 3年

私自身としては、やはり GPA などの成績が関わってくると、専門科目の方を優先してしまっていて、それ以上のものを取って、専門科目の成績が下がるのは避けたいという考えがどうしてもあるので、成績に関係なく聴講できるような機会だったりとか、試験をする科目ではなくて、グループでレポートを作成して単位認定するような科目などがあれば、気軽に他学部と交流ができるかなと考えます。

学生：兼平 実侑・作業療法学専攻 3年

私の方からオンデマンドでやったらどうかみたいな意見を出させていただいたんですけど、やっぱり授業を講義形態としてやってしまうと、やっぱり自分の専攻のものではないので、やっぱりその受けるっていうことに対してすごいハードルが上がってしまうのかなっていうふうにすごい感じていて。なので、その授業形態であったり。なんででしょう。その単位認定のことですとか。そういうのをもう少しその自分の専攻を優先しつつ、自分の興味を生かせる、興味を反映できるような仕組みになればいいのかなって思います。すいません。

座長：山本 和恵・建築環境学科教授

ありがとうございました。

学生：鈴木 映里・言語聴覚学専攻 3年

言語聴覚学専攻3年の鈴木です。時間のことで考えると、私個人としては、特に1年生は余裕があったので、その時期にもう少し専門的な科目を入れてきても、大丈夫だったように感じます。

あとは授業内容が結構かぶっていることがよ

くあったので、そこを分担していただくと、もう少しコンパクトに効率よく進んで、他の私達が興味のある科目をやってみるといった形にもできるのではないかと思います。

あとは先ほど述べたみたいなの、単位とか出席数に関わらず講義を受けられる機会があったらいいなと思います。以上です。

学生：中村 彰吾・視覚機能学専攻 3年

視覚機能学専攻3年の中村です。そうですね。やっぱり授業として考えてしまうと、成績や GPA、単位などがあるので。ちょっと逸脱した意見にはなるかもしれないんですけども、長期休みのときに、授業ではなく講習として参加者を募ってみてはいかがかとは思っています。それですと、時間などはおそらくか、最低限確保できるかなとは思っています。拙い意見ではありますが、ご参考になればと思います。ありがとうございます。

学生：及川 優花・看護学科 3年

看護学科3年の及川優花です。先ほど私の方でも述べた部分の中で、その短期集中講座の方で重度身体障害の内容のものがあったんですけども、そういう講座ってというのは、私の場合は単位上限になってしまったので、単位それは初めてカリキュラムとしてやるための練習としての短期集中講座だったので、単位化はなかったのです。

だからこそ受けられたってということがあったので。そういう部分に関してもやっぱり先ほど多くの方も言ってらっしゃいましたけども、そういう単位にならないもの。単位が別に欲しいわけじゃなくて、実際に受けてみたいっていう思いの方が強いので、そういう単位にならないものっていうものを、あってもいいのかなっていうのと、例えばその資料を用意しなきゃいけないとかっていうのがあったので。

そうであれば、Eサポの事前の申し込みがあったりとか、そういう Google フォームによって管理しているものもあると思いますので、そういうものに関して例えば1週間前までに、こういう講座があるから、何人か申し込みの方いらっしゃれば、Google フォームの方から申し

込みくださいとか、概ねその授業の内容というものが初めて行ってもわかるように、ホームページに例えば代表的な授業の概要に関して、ある程度の情報を載せていただくと、これから受講する方に対してもこういう授業だっていうのもわかるし、大学生としても、こういう授業だからちょっとやってみようかなって思ういは出てくるのかなと思います。

学生：二川原 東吾・現代社会学科3年

現代社会学科3年の二川原です。実際問題、各学生の授業や講義の合間を全部合わせての、そういった希望の授業開催は難しいと思いますので、先ほど中村さんのおっしゃったように、長期休暇や、試験日程がない週での講演会のような形や、参加しづらい学生に対してのGoogle クラスルームやホームページのユニバでの録画形式での資料記録の閲覧ができれば、授業形式として受講をためらう学生でも科目に対する興味を持ち、参加する機会のきっかけになると思います。失礼します。

学生：井上 ことね・経営法学科3年

はい。経営法学科3年の井上です。どうしても自分は授業を受けた、受けてみたい授業があるけれども、受けられないっていうものの障壁になるものっていうのは、どうしても時間が足りないとかであったり、それこそ私は、少々遠方の方から通っているのでもうしても5限のさらに6限、7限って言うのを設置されてしまうと、その遠方から来る学生っていうのはちょっとどうしてもハードルが高いままなのかなと思いますので、やはりそのオンデマンド形式を活用したGoogle クラスルームであったりとか、そういったもので隙間時間に授業を受けられるような形であったりとか、Google クラスルームを活用すれば、学生同士の意見交換などもできるのでそういったインターネットの活用などにこれからもっと力を入れていければ、気軽に取りたい授業を取れるみたいな。そういったハードルの低さ、ハードルを低くすることに繋がるのではないかと考えます。以上です。

学生：浅野 颯斗・建築環境学科3年

建築環境学科3年の浅野颯斗です。やっぱり成績とかGPAに関わってきてしまうと、あとハードルが高くなってきてしまうと思うので、やっぱりその全ての学科の学生さんたちの時間の合う場所っていうのもないと思うので、やっぱり長期休みであったり、それか、隙間時間にやれるオンデマンド形式を取るのがやっぱり一番いいのかなと感じました。ありがとうございます。

学生：高田 陸・知能情報学科3年

知能情報システム学科の高田です。やはり、そういった機会を科目単位、単位のある科目の授業として設定してしまうと、履修登録の上限に直面してしまったり、あとは必要単位数の他に科目分野ごとの必要単位数というものもあって、礎科目とか専門基礎科目とかで、それぞれ何単位取らなきゃいけないという制限といった、そういう問題にも直面してきますので、やはり単位が絡まない時間割以外での開催がいいのではないかと思います。

そうすることにより、本当に興味がある人っていうのを、より多く集めることができるんじゃないでしょうか？ 以上になります。

学生：榊原 花梨・臨床工学科3年

臨床工学科3年榊原花梨です。私は実際に現場で働いている方のお話を聞く機会が、もっと講義の中で増えていけたらいいかなと思います。多くの学生はきっと将来働くために資格を取り取りたいとか、そういう将来を見据えて大学に入学していると思うので、将来自分が働くビジョンが見えるような講義が増えると、もっと学生の興味が湧く授業が増えるかなと思いました。以上です。

質問者：藤澤 宏幸・理学療法専攻教授

ありがとうございます。成績に係るっていうか、やっぱり試験を受けて何か単位を取らなきゃっていうのがかなり障壁になってるんだなっていうのは今伺ってて。ですから、興味は皆さん持っていて。だから、そういう割と講演

会という話題も出ましたから、そういうところで我々が皆さんが興味を持てるような最後のね、いろんな、あの業種の方を呼んでお話を聞くとかそういう機会も含めて、いいテーマが設定できれば、来てくださるんだなっていう感じは、感触ありました。ありがとうございます。

座長：山本 和恵・建築環境学科教授

そうですね。場合によれば、キャップをちょっと除外する科目などを作ったり。それから、他学部履修の場合には、到達目標について、別の設定をするということもありうるかもしれません。いろんな可能性について、教員としてはちょっと考えてみたいと思います。

当面の考え方としては、気楽にオンデマンドで他の学科の講義を聞けるようにするというようなことは、比較的すぐに実現する可能性があると思いますので皆さん、いただいたご意見をなるべく無駄にしないような形で来年、それから再来年度にはカリキュラムが変わりますので来年から、そして25年からはしっかりとカリキュラムに反映させていきたいと考えております。本日、貴重なご意見しっかりと考えた上でご発言いただきまして、ありがとうございました。

司会：広原 雄二・経営法学科教授

学生の皆さんどうもありがとうございます

た。以上で本日の研修会のプログラムは全て終了しました。

まとめ

まず、他学部との交流実績について意見交換されました。具体的には、探究理解プロジェクトや専門職連携論などの授業を通じて、他学部の学生や教員との交流経験はあるものの、十分に活用できていない現状が報告されました。次に、他学部受講の制約について意見が出され、興味関心がある場合でも、時間割の都合や単位数の関係などから他学部の授業を受講することが困難な状況が指摘されました。

そこで、他学部連携強化のための発言があり、オンデマンド授業の導入や休暇中の短期集中講座の開催、Google Classroomの活用など、成績に影響しない形での他学部受講機会の拡充が提案されました。

これらの意見を受けて今後に求められることは、①他学部連携授業のシラバスを充実させ、授業概要を事前に周知すること。②他学部連携授業の成績評価方法を見直し、興味ある学生の参加を促すこと。③休暇中に他学部連携の短期集中講座を試行的に実施すること。④授業のオンデマンド化を進め、時間的制約を緩和すること。④ Google Classroom等の活用により、他学部との情報共有を図ること。以上の4点です。

資料1：研修会次第

2023年度 東北文化学園大学 FD・SD全体研修会 次第

日時：2023年 8月 2日 (水) 10:00～16:00

会場：1号館地下大講義室 (ハイブリッド形式で実施)

テーマ：本学の特色をいかにカリキュラムへ反映させるか？

(次 第)

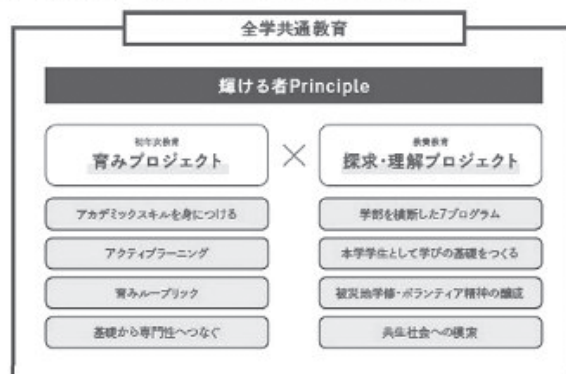
総合司会：星教務課長

時間	内容・講師等	司会・座長																								
10:00～10:05	開会の挨拶 FD・SD委員会 藤澤宏幸 委員長																									
10:05～11:05	「2025年度カリキュラム改正の要点」 講師：山本 和恵 教授 (教務部長)	司会：広原 雄二																								
11:10～11:15	休憩 (5分)																									
11:15～12:15	18歳人口減少の中で選ばれ続けるための大学になるために ～「学部間連携の特色づくり」のために考えるべきこと～ 講師：進研アド東北支社社長 高橋 良太 氏 進研アド東北支社 小谷野 哲馬 氏	司会：鈴木 伸夫																								
12:15～13:15	休憩 (1時間) 「東北文化学園大学名誉教授称号授与式」(12:15～12:30 予定)	進行：庶務課																								
13:15～14:15	「本学の連携教育についてー医療系を中心として」 講師：大黒 一司 教授 講師：黒後 裕彦 教授 講師：香山 明美 教授 講師：藤原 加奈江 教授 講師：工藤 剛実 教授	座長：大黒 一司																								
14:15～14:20	休憩 (5分)																									
14:20～15:50	学生との意見交換会 「幅広い学びに対する学生のニーズー学生は何を求めているか？」 <table style="width:100%; border:none;"> <tr> <td style="text-align:center;">学生 (学年)</td> <td style="text-align:center;">支援教員</td> </tr> <tr> <td>理学 中村 美稀 (3年)</td> <td>村上 賢一 准教授</td> </tr> <tr> <td>作業 兼平 実侑 (3年)</td> <td>大塚 千賀子 助教</td> </tr> <tr> <td>言語 鈴木 映里 (3年)</td> <td>阿部 千佳 助教</td> </tr> <tr> <td>視覚 中村 彰吾 (3年)</td> <td>坂本 保夫 教授</td> </tr> <tr> <td>看護 及川 優花 (3年)</td> <td>山岸 貴子 准教授</td> </tr> <tr> <td>現社 二川原 東吾 (3年)</td> <td>小淵 高志 准教授</td> </tr> <tr> <td>経法 井上 ことね (3年)</td> <td>秋山 まゆみ 准教授</td> </tr> <tr> <td>知能 高田 陸 (3年)</td> <td>神村 伸一 准教授</td> </tr> <tr> <td>建築 浅野 颯斗 (3年)</td> <td>一條 佑介 准教授</td> </tr> <tr> <td>臨工 榑原 花梨 (3年)</td> <td>佐々木 典子 准教授</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align:right;"><u>計10名</u></td> </tr> </table>	学生 (学年)	支援教員	理学 中村 美稀 (3年)	村上 賢一 准教授	作業 兼平 実侑 (3年)	大塚 千賀子 助教	言語 鈴木 映里 (3年)	阿部 千佳 助教	視覚 中村 彰吾 (3年)	坂本 保夫 教授	看護 及川 優花 (3年)	山岸 貴子 准教授	現社 二川原 東吾 (3年)	小淵 高志 准教授	経法 井上 ことね (3年)	秋山 まゆみ 准教授	知能 高田 陸 (3年)	神村 伸一 准教授	建築 浅野 颯斗 (3年)	一條 佑介 准教授	臨工 榑原 花梨 (3年)	佐々木 典子 准教授		<u>計10名</u>	座長：山本 和恵
学生 (学年)	支援教員																									
理学 中村 美稀 (3年)	村上 賢一 准教授																									
作業 兼平 実侑 (3年)	大塚 千賀子 助教																									
言語 鈴木 映里 (3年)	阿部 千佳 助教																									
視覚 中村 彰吾 (3年)	坂本 保夫 教授																									
看護 及川 優花 (3年)	山岸 貴子 准教授																									
現社 二川原 東吾 (3年)	小淵 高志 准教授																									
経法 井上 ことね (3年)	秋山 まゆみ 准教授																									
知能 高田 陸 (3年)	神村 伸一 准教授																									
建築 浅野 颯斗 (3年)	一條 佑介 准教授																									
臨工 榑原 花梨 (3年)	佐々木 典子 准教授																									
	<u>計10名</u>																									
15:50～16:00	閉会の挨拶 (総評を兼ねて) 加賀谷 豊 学長																									

資料2：輝ける者 Principle

「輝ける者 Principle (全学共通教育)」について

本学では、全学共通教育として、教養教育「探求・理解プロジェクト」と初年次教育「育みプロジェクト」に取り組んでいます。専門的な学びの礎となる初年次教育と、生涯にわたり学ぶ姿勢を身につける教養教育を、全学共通カリキュラムとして展開し、1人ひとりの学びを深めます。



「教養教育 探求・理解プロジェクト」

「探求・理解プロジェクト」は、本学の建学の精神である「輝ける者を育む」ために用意された、下表の7科目からなる教養プログラムです。総合大学の特色を活かし、医療、工学、社会学、経営法学等、学部専門領域の垣根を超えて、様々な分野の教員たちがチームをつくり、実践的なプログラムを提供します。特に全学共通教養科目「輝ける者」は、実社会を学びのフィールドとし、東北・宮城で活躍する起業家や地域の方々との交流や協同活動を通じて、自ら課題を発見し、解決しようとする力や生涯学び続ける姿勢を育むプログラムです。

なお、本科目は、「ボランティア探求」以外は選択必修科目（2単位以上）です。卒業要件になりますので、必ず1科目は履修しなければなりません。科目選択に当たっては、1年次に基礎教育センターから履修ガイダンスがあります。

基礎科目【探求・理解プロジェクト】 *内容詳細は2023年度シラバスを確認してください。

科目名 (目的)	配当年次	内容
輝ける者 (自己の探求・理解)	1年通年	仙台の音楽文化や地域の地場産業を含めた実効的な地域創生事業を学び、実践し、提案できる力を養う。その際に地域企業や市民、芸術文化を支える地域の才能を巻き込み、イベント等で実践できる豊かな人間性、協調性、コミュニケーション力を身につける。
人間文化探求 (人間の理解)	1年通年	私たち一人ひとりの生き方を「人間文化」と捉え、その多様性に触れながら、人生の価値、意味、目標など人間にとって根源的・普遍的な課題を探求する。授業は隔週で行う。
地域活動・ボランティア (地域共生の理解)	1年通年	様々な領域の活動に取り組み、現代社会に生きる自己の存在の有用性を獲得する機会とするとともに、理想とする地域社会の構築に向けた一員としての意識と態度の涵養を図る。
いのち 生命を考える (生きることの理解)	1年前期	「ヒトの生命」を主たるテーマとし、「生きること」「死ぬこと」「障害と共に生きること」等について講義と意見交換を通じて考える。
	1年後期	
現代社会を よる 視る (多様性の理解)	1年前期	現代社会における様々な課題について「多様性の理解」をコンセプトとし、複数の信頼できるエビデンスをもとに、学生が自分の意見をレポートにまとめ、教員のフィードバックや他の意見を参考にそれをブラッシュアップするスキルを学ぶ。
	1年後期	
生活の中の科学 (生活における科学の理解)	1年前期	「安全・安心」をキーワードに、現在の科学技術がいかに我々の日々の生活に役立っているか、また科学技術の将来のあるべき姿について学ぶ。
	1年後期	
ボランティア探求 (社会的実践力の強化)	2年通年	各種ボランティア活動の実践を通じて、各種ボランティアの指導者並びにNPO・NGO実践者・指導者等を目指すことを目的とする。